

白壁の町並み 学生が風を呼ぶ

重伝建選定から40年 丸亀・本島の笠島地区



#まち
Town

細い路地に沿って10棟近くの木造家屋が所狭しと並ぶ。黒い焼杉の壁に本瓦、漆喰の白壁――。巡っていると過去にタイムスリップしたかのような気持ちになる。

瀬戸内海に浮かぶ本島(香川県丸亀市)の北東部、笠島地区の光景だ。本島は、造船や操船で豊臣秀吉の天下統一を支えた塩飽水軍の本拠地として知られる。中世に城が築かれた笠島地区は、城下町の要素を持つ歴史的な町並みが今も残り、「塩飽大工」と呼ばれた名工たちが手がけた技を見ることが出来る。

下町の要素を持つ歴史的な町並みが今も残り、「塩飽大工」と呼ばれた名工たちが手がけた技を見ることが出来る。

「子どもの頃は、地区内に同級生が10人いたんです」

公開している家屋の管理などを担うNPO法人「本島町笠島まち並保存協力会」の三宅邦夫会長(76)はこう振り返る。



江戸時代から戦前にかけて建てられた木造建築が並ぶ本島の笠島地区。香川県丸亀市本島町笠島

国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている本島の笠島地区。11月、香川県丸亀市、朝日新聞社機から、白井伸洋撮影

人口激減 存続へ「外部の助けも求め」

当時、島民は3千人を超え、笠島地区には3軒の商店もあった。2日間にはわたった地区の秋祭りでは屋台が並び、多くの人でにぎわった。

しかし、島には高校も大きな産業もない。進学や就職を機に島を離れる人が多く、島民は約230人まで減った。

丸亀市によると、重伝建エリアには40年前に231人が暮らしていたが、今は20人ほど。三宅会長によると、エリア内には空き家も多く、所有者がわからなくなっている家屋もあるという。

幼少期から笠島地区で暮らす70代男性は「この課題などをまとめた初年



四国職業能力開発大学校の学生らとしめ縄づくりをする笠島地区の住民＝香川県丸亀市本島町笠島

町並みをいつまで維持できるのだろうか」と不安を口にする。自治会で担ってきた草刈りやごみ拾いの顔ぶれはもう高齢者ばかり。この男性はその中でも若い方だという。こうした状況の笠島地区に3年前から、学生が通っている。技術者を育成する四国職業能力開発大学校(丸亀市)の村井花子講師(建築意匠設計、まちづくり)のゼミ生たちだ。

NPO法人「香川歴史的建造物保存活用会議」が開く勉強会で三宅会長と出会ったのをきっかけに、村井講師は卒業研究に取り組み学生を笠島地区に連れて行くようになった。

町並みの価値や地区の課題などをまとめた初年度の研究発表の際、ある学生が「地域のひととお話するイベントを」と提案した。確かに地区を歩いていても、住民と接する機会は少なかった。

村井講師は翌春、住民らの会合で餅つきに誘ってみた。すると、住民らは「餅つきするなら大鼓台を出そう」。話はどうも膨らみ、気づけば「お祭り再現プロジェクト」になっていた。

その年の11月、同会議主催で、長年倉庫に眠っていた「千歳楽」と呼ばれる太鼓台を住民と学生が一緒に組み立て、餅つきとともに楽しんだ。それ以降も、虫送りやしめ縄作りなど、季節行事をイベントとして次々と再現してきた。住民の男性は「若い人が来ると、皆が外に出るきっかけになる」と喜ぶ。

村井講師は「学生がイベントをすることで島外の人も参加しやすい。移住につながったり、島を出た人が再び関心を持ったりするきっかけになればいい」と話す。

今年11月、笠島地区の重伝建選定40周年記念シンポジウムが市内であった。登壇した三宅会長は「建てられた当時のままの状態を残しているのが笠島の最大の価値。暮らしてきた人の思いも尊重しながら、外部の助けも求めている」と話した。(木野村隆宏)